

学 会 報 告

第 10 回進化経済学会北海道大会

須田 文明

2006 年 3 月 25 ～ 26 日に、北海道大学にて開催された、第 10 回進化経済学会北海道大会に参加する機会を得た。今回の大会のテーマ「進化経済学の再定義：学の間と融合」にふさわしく、その企画セッションも盛りだくさん、「マルチ・エージェント・シミュレーション」、「制度と知識」、「社会経済実験」、「U マートプロジェクト」、「経済物理学」、「コンヴェンションの経済学」、「イノベーション」、「制度設計とガバナンス」、「地域通貨の実証分析と政策展望」といった具合である。

私はまず、「制度と政策」セッションに参加し、私自身がディスカッサントを勤めた小田報告「戦後の農業政策と農協発展への取引費用アプローチ：制度と組織発展に関する日独比較」を拝聴した。小田報告はノースの議論に主として依拠していたが、私自身はウィリアムソンの資産特殊性概念に基づいた取引費用理論の方が使い勝手がいいのでは、とコメントさせて頂いた。

また、私は、大阪市立大学大学院の海老塚教授と「コンヴェンションの経済学」セッションで、「モノの試験と正当化：ボルタンスキとテヴノの場合」という共同報告を行った。経済アクターの相互行為の調整を検討しようとする場合、お互いが何を考えているかは、基本的に不可知なのであり、相手の考えを予想し尽くそうという試みは不可能である。たとえばこうした調整は、「焦点」を目印にして、実践的に解決される。価格もまたこうした目印の一つである。しかし価格のみにパラメータ的に反応するアクターを想定することは、現実の経済分析においては反生産的である。そこで我々は慣行や慣習などと翻訳される convention をこうした目印として検討した。

このセッションでは他に、立見報告「コンヴェンションの経済学と産業集積」、荒川報告「制度の経済学の中におけるコンヴェンションの経済学の位置」があり、それぞれ、経済地理学および経済学説史という専門から、自説を展開されていた。なお、フランスのコンヴェンション経済学およびその関連書籍については、いずれも須田他訳で、パティフリエ編著『コンヴェンション理論の射程』（昭和堂）、ボルタンスキ、シャペロ『資本主義の新しい精神』（ナカニシヤ出版、2007 年）が逐次、刊行される予定である。

さらに、本大会では招待講演として S. フリートウッド氏（ランカスター大学）と S. ボールズ氏（マサチューセッツ州立大学）が報告を行った。この進化経済学会でも頻繁に取り上げられるように、進化ゲーム理論や実験経済学、経済心理学等、経済理論におけるミクロ理論上の革新がみられる。こうしたミクロ理論に深く分け入った、ボールズ氏の「個人的選好と社会制度との共進化」という報告を聞いて、勝手に思ったのだが、選好は制度に内生的であり、個人は、彼等がその中に埋め込まれている制度に応じて自らの選好を変化させる。個人は、市場の中に置かれるほど、その利他主義や公平感覚を喪失するだろう。市場が個人間でのスクリーンの役割を果たしてしまい、もはや個人は、自らの生き残りのために、他人のことなどかまっていられないのである。こうしたミクロ経済理論の革新が有する実践的示唆はどのようなものであろうか。それは、社会経済制度の中で、可能な限り市場の純化傾向を減じることであるように思われる。しかし、こうした処方箋は、政府の進める経済政策にたいする著しい後退を意味するものであろうか。そうではなかろう。たとえば金融市場という市場主義の独壇場でさえ、社会的責任投資といった考え方が登場しているのである。

新古典派経済理論へのまともなミクロ社会経済理論のオルタナティブを鍛え上げることが、経済政策の構想に不可欠であり、私たちは、コンヴェンション理論という研究手法により、こうした課題に取り組もうとしているのである。